

令和 5 年 5 月 29 日現在

機関番号：32686

研究種目：新学術領域研究(研究領域提案型)

研究期間：2017～2021

課題番号：17H06346

研究課題名(和文)顔と身体表現の比較現象学

研究課題名(英文)comparative phenomenology of face and corporeal expression

研究代表者

河野 哲也(KONO, Tetsuya)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：60384715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 42,510,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築：多文化をつなく顔と身体表現」という新学術領域研究における計画研究「顔と身体表現の比較現象学」を担当した。顔や身体表現を文化差や通文化性、あるいは異文化理解の観点から学際的に調査し、新たな学問領域として立ち上げる哲学的・理論的な基礎づけを行なった。本計画班が中心となり、「顔身体学」の理論基盤を体系化するための『顔身体ハンドブック』(東大出版会)を出版し、Philosophy and Cultural Embodimentという国際機関紙を発行した。身体性に関する研究倫理基準を作り、顔身体カフェというアウトリーチ活動も積極的に行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、顔身体学の基礎を担う理論的研究として新領域の構築に貢献し、領域全体の導入に役立つ『顔身体学ハンドブック』、超領域的な研究論文を掲載するための国際雑誌Philosophy and Cultural Embodimentを刊行した。また身体性についての研究倫理の基準と教育プログラムを作成した。その結果として、最終評価として本新領域はA+の評価を獲得した。本計画班は、哲学と倫理学においては、スポーツと対話場面に間身体的コミュニケーションを独自開発したアプリケーションを使ったデジタル人文学的研究、および、身体性をめぐる偏見や差別を現象学的に考察した研究を学会発表や書籍、論文として公開した。

研究成果の概要(英文)：This research "Comparative Phenomenology of Face and Body Expression" was conducted as part of the planned research project in the new academic field of "Face-Body Studies n in Transcultural Situations: Faces and Body Expression connecting Multiple Cultures. We conducted an interdisciplinary study of faces and body expressions from the viewpoints of cultural difference, transculturality, and cross-cultural understanding, and provided the philosophical and theoretical foundations for establishing this as a new academic field. The project team took the lead in publishing "Handbook of Face Body Studies" (University of Tokyo Press) to systematize the theoretical foundation of "Face-Body Studies," and published an international journal called Philosophy and Cultural Embodiment. We created ethical standards for research on corporeality, and actively conducted outreach activities called "Face-Body Cafe".

研究分野：哲学、倫理学

キーワード：顔身体学 比較現象学 トランスカルチャー 身体性認知 文化的身体性 顔身体の倫理 デジタル人文学 顔身体カフェ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築：多文化をつなぐ顔と身体表現」という新学術領域研究における研究項目 C01 計画研究「顔と身体表現の比較現象学」を担当した。顔や身体表現を文化差や通文化性、あるいは異文化理解の観点から学際的に調べ、新たな学問領域として立ち上げるという新学術領域研究全体における哲学的・理論的な基礎を担った。

本領域研究は、私たちの身体性、とくに対人関係や社会に関わる身体の振る舞いを意識化し、それぞれの文化で「当たり前」とされてきた身体のあり方を、トランスカルチャー状況下にある現代社会において再考する目的を持っている。こうした領域研究の目的にとって、現象学はとくに重要な理論的貢献ができる。現象学ではフッサール以来、身体性を重要なテーマとしてきたが、とくにサルトル、メルロ＝ポンティといったフランス現象学の流れの中で現象学的身体論は大きく展開し、またレヴィナスは、顔という存在の独特の倫理性を自己の哲学の中核においた。

だが、これらの古典的な現象学においては、身体主体がすでに自己身体に取り入れている文化社会的制度をどのように意識化して解釈し、それをどのように利用あるいは拒否し、どのように変容させるかについての具体的な記述はなされていなかった。ここには、現象学の創始者たちが西洋人の男性ばかりであり、自分の身につけた文化社会的制度が自分の生活する社会の規範と齟齬を起こすことが少なかったという無自覚的な観点の偏りが影響している。こうした状況に対する反省に立ち、北欧や北米を中心として現象学の観点から女性の身体性を分析するフェミニズム現象学が興隆している。ここでは、女性にとって抑圧的な文化社会制度をただ政治的に批判するだけではなく、身体的主体として女性がそれらの制度をどのように生き、どのように解釈し、それをどのように抵抗し、また変容させているかの具体的な分析がなされている。本研究では、この新しい現象学の動向をさらに二つの方向に延長することを試みる。ひとつは、北米や北欧の現象学的身体論にまだ欠けている文化比較の観点である。文化社会制度の違いにより、社会文化的セッティングにおいてジェンダーが具体的にどのような過程で身体表現や表情を形成していくのか、あるいは同じ社会制度がエスニック・グループの違いによりどのように身体的に解釈されるのかといった身体の比較現象学はまだ開始されていない。二つ目は、身体を皮膚の内部に前提せずに、身体の延長物であり身体表現の加工行為としての化粧、被服、理容、入れ墨などに注目し、それらの加工が他者との社会的関係をどう変化させ、当人はそれをどのように利用しているかについての研究を行った。

これまで、報告者らはともに現象学的身体論を基礎とする研究を推進し、現象学関係の学会を通じて交流してきた。河野は、平成 24～28 年度科研費基盤研究(A)「知のエコロジカル・ターン」や平成 28～30 年度挑戦的萌芽研究「新しい東洋的身心論とエコロジカル・エンボディメント理論の国際発信」などを得て、『知の生態学的転回』(2013)、『境界の現象学』(2014)、『現象学的身体論と特別支援教育』(2015)などの現象学的身体論に関わる研究を発表してきた。小手川は、平成 26～28 年度科研費若手研究(B)「フランス現象学の新局面とその展開可能性」や平成 28～30 年度基盤研究(B)「北欧現象学者との共同研究に基づく人間の傷つきやすさと有限性の現象学的研究」を得て、『甦るレヴィナス』(2015)、「女性的な」身体性と「男性的な」身体性」(2016)などの研究を発表してきた。

2. 研究の目的

フッサールにはじまる現象学的立場から、身体表現がどのように文化社会的制度を取り込んでいき、それがどのように個々人之間主観的關係を導くのか、身体主体がすでに自己身体に取り入

れてもいる文化社会的制度をどのように意識して解釈し、どのように利用あるいは拒否し、どのように変容させるかを分析する。この計画では身体表現の現象学の一般理論を論じると同時に、異なる社会文化的制度における身体性の変異と変容に注目する「比較現象学」の確立を目指す。

本研究では領域全体の発展を哲学的に再考・再構築し、ネットワークを広げる役割を担い、(1)顔身体学の現象学的理論化、(2)比較現象学という方法論の確立、(3)身体加工の比較現象学を目指す。(1)の顔身体学の現象学的理論化については、現象学とその周辺の哲学的理論を再検討し、また、領域内での実証的な諸成果を十分に参照しながら、顔と身体が人間の存在にとっていかなるものであるか、とりわけ無自覚のうちに私たちが発信している身体的な表現が間主観的相互作用に及ぼす影響、また身体に定着した文化社会的制度の意識化と変容の過程についての一般理論を構築する。(2)は、これまで現象学的哲学が疎遠であった文化人類学や比較文化論の分野と連携し、文化社会的な事象を、個々の主体がどのように身体化し、どのように解釈していくかを、複数の文化社会のあいだで比較することで、各々の文化社会とそこに生きる個人との関係を複眼的に明らかにしていくための一般的な方法論を理論的に確立させる。(3)はジェンダー意識とも絡めて、まず、化粧、被服、理容、入れ墨などの身体加工が、その主体の生活世界においてどのような意味をもっているのか、また、それらの加工によりどのような対人関係の変化が起きるのか、同種の加工であっても文化社会の違いによっていかなる自己変容が起きるのか、単なるアンケートだけではなく、インタビューや本領域研究における文化人類学者や心理学者から協力を得ながらフィールドワークや心理学的調査を実施する。

3. 研究の方法

研究方法としては、まず(1)顔身体学の現象学的理論化に関しては、文献研究と国内学会に参加することによる情報交換だけではなく、本新学術の他の研究計画班と密に交流し、それらの計画での成果を踏まえながら理論構築を行う。(2)身体加工の比較現象学の構築に関しては、海外の現象学者、認知科学者、社会学者、文化人類学者と連携し、身体加工の現象とその文化的、社会的、美的な意味と倫理性についての実証的調査・フィールドワーク(インタビュー、アンケート、参与観察)を行い、その結果を現象学的な観点から分析する。以上の研究の成果は、当研究領域内での成果報告、国内外の哲学・心理学・社会学・認知科学関連の学会、専門誌で発表することはもちろん、一般読者向けの書籍・雑誌、さらにインターネット上にウェブサイトを構築して研究成果を報告しながら、アウトリーチ活動も含め、広い範囲で成果の周知に努める。

4. 研究成果

この研究は「顔・身体学」という新領域の確立に寄与するが、同時に、本研究は現象学・哲学としても二つの新しい試みを含んでいる。ひとつは「比較現象学」というこれまで現象学に存在しなかった分野と方法論の確立である。比較現象学は、人類学と心理学の実証的なデータに依拠しながら、文化社会制度の当事者の観点に立った比較的分析を行う点で、新しい現象学のあり方を追求している。また同時に、本研究は新しい「実験哲学」としての「実証的現象学」の試みとして位置づけることができる。この20年程で興隆してきた実験哲学は、哲学を思弁としての学から解き放ち、哲学の理論に関して批判的に実証的検討を加える新しい哲学の潮流である。しかしそのテーマは心の哲学や論理学など分析哲学の一部に限られている。本研究は、これに対して、より文化社会的なテーマについて哲学理論の実証的な裏付けを求める点において新しい研究分野と方法を切り開いている。これは哲学、及び現象学に、実証科学との新しい連携の可能性を示す独創的研究となるだろう。各年度の成果は以下のようなものである。

2017年度は採択結果が6月に出て、実際に研究に従事できるようになったのが7月からのため、実質的に半期程度の活動となったが、以下の研究を実施できた。

(1) 領域会議への参加と領域内での研究計画のすり合わせと交流：9月11日のキックオフシンポジウム、12月1日の第1回領域会議において本計画班の目的と5年間の計画、基本的な理論を発表し、領域内で共有した。また12月2日の第2回公開シンポジウムでは、比較現象学の立場を打ち出し、領域全体をどのように哲学的に統括していくかについて論じた。3月初頭では、バリ島ワークショップで、本計画班から菊竹智之氏と赤坂辰太郎氏に口頭発表してもらい、バリ舞踊やガムランの研究者たちと議論し、異分野融合的な研究を展開できた。(2) 自主シンポジウム：3月13日、14日、16日にフランスの現象学的身体論の第一人者、B・アンドリュウ氏(パリ第5大学)、A・ルジェンドル氏を招聘して、講演会とシンポジウム「間とあいだの比較現象学」を実施した。全体で12名の発表者による15回の口頭発表が行われ、参加者は延べ60名ほどであった。日仏米の比較から、時間的かつ空間的で、質的でもある「ま、あいだ、あわい」をめぐる、その記述方法や生活世界における意味について議論がなされ、このテーマでの特徴ある国際シンポジウムとなった。(3) 顔身体カフェ：12月23日の代官山クラブヒルサイドサロンにて、領域代表の山口氏を講師に招き、第1回顔身体カフェを、本領域のアウトリーチ活動として行った。参加者60名。第二回は、金沢21世紀美術館の協力で1月20-21日に美術館のレアンドロ・エルリッヒの展示を開設した後に、アートと身体性をテーマとした哲学対話を行い、本研究についてのフィードバックを得ることができた。(4) 比較現象学のためのアプリケーションの開発：本研究での現象学を遂行するための映像分析アプリケーションを開発し、個別事例学の具体的研究方法を得た。

2018年度は本研究の2年目として、領域全体と連携しつつ予定通りに以下の4つの研究事業を行った。(1) 顔身体学の現象学的理論化：「顔身体学」の理論的な基盤を現象学的に整理し体系化する作業を行った。成果は、2度の領域会議、心理学班・文化人類学班と共同のワークショップ、3月の自主シンポジウムで発表した。『顔身体学ハンドブック』を東大出版会に提案し出版が決定した。(2) 比較現象学という方法論の確立：国内外から講演者を招集し、顔身体運動の文化社会的な側面に関して共同研究発表と情報交換を行った。8月下旬の東華師範大学(上海)では、S.Gallagher(米)、J-M. Roy(仏)、Jing Heら上海・台湾グループと身体性認知のワークショップを行い、11月には、Gallagherを招聘して「匿名の視線と自己の成立」と題した自主シンポジウム、同11月の日本現象学会大会では、Gallagher、D. Huttoなどと米・豪の研究チームと共同してシンポジウム「技能の現象学」を実施した。大きな公的な国際シンポジウムとなり、研究が大きく前進した。(3) 人種とジェンダーの比較現象学の構築：A. Al-SajiとH.Ngoを招致して、8月に世界哲学大会内の国際ワークショップ「文化横断的な人種の現象学」および立教大学での連続ワークショップを実施し、人種化された顔身体知覚と文化・社会的制度・宗教の関連の分析を試みた。3月に国際シンポジウム「トランスカルチャーとは何か」を開催し、現代哲学や人類学の動向も視野に入れてトランスカルチャーの再定義を試み、その背景や文化概念を明確化した。さらに、トランスジェンダーの顔身体表現、性自認と自己の身体認知の変容の関係を検討し、比較現象学の一般理論を具体的な事象のもとで検証した。(4) 顔身体カフェの実施：アウトリーチ活動として顔身体カフェを心理学班と共同して東京と福島で実施した。

2019年は、本研究の3年目として、領域全体と連携しつつ、以下の3つの研究・事業を行った。(1) 顔身体学の現象学的理論化：新学術領域「顔身体学」の理論的な基盤を整理し体系化するため、河野と小手川が『顔身体ハンドブック』(東大出版会)の編集を共同で行った。(2) 身体性比較現象学の確立：身体性認知科学・哲学の専門家であるA.Chemero氏(シンシナティ大

学)を、身体性認知哲学で澄明な J-M. Roy 氏(リヨン高等師範学校)を、心の哲学を専門とする Jing He 氏(華東師範大学)をはじめ数名の研究者を招聘し、公募班の長滝祥司氏を含め多数の研究者が参加した「Radical Embodied Cognition」と関連ワークショップを開催した。9月には、顔と身体の神経生理学を専門とする J.Cole 氏を英国から招聘し、稲原美苗氏(神戸大)、M.Peckitt 氏(阪大)、河野とともに日本心理学会での公募シンポジウム、茂木健一郎氏と河野とともに日本顔学会で学会企画サテライト・シンポジウムを実施し、神経病理学的な立場から顔身体表現の意味を多角的に論じた。この分野の学会としてインパクトのあるシンポジウムとなった。(3)顔身体カフェの実施:12月に領域会議と合わせて領域代表の山口真美氏を提題者として顔身体カフェ「自分の顔が好きですか?顔を知ろう」をジュンク堂書店那覇店にて実施し、20名ほどの一般参加者と活発な議論を展開できた。

2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大に伴って多くの国内国際学会が中止延期され、調査や実践研究についても当初の計画を大幅に変更せざるを得ない事態が生じた。そこで、研究調査とその発表をオンライン中心に切り替え、可能な範囲で最大限の研究進展に取り組んだ。

(1)顔身体学の現象学的理論化:『顔身体学ハンドブック』(東大出版会)を21年3月に出版し、領域に理論的基礎と体系性を与えた。比較現象学的視点から、河野がアフリカの身体性概念を西洋のそれと比較する研究を行った。(2)顔身体学国際誌の発刊の準備:『哲学と文化的身体性』"Philosophy and Cultural Embodiment"という領域の総括班と各国の協力者を編集査読委員に据えた英文雑誌を21年前期にオンライン出版できた。これによりこの分野の自主的な国際発信が可能となった。(3)顔身体運動のビデオ映像分析・評価方法の展開:ビデオ録画された顔身体の運動やパフォーマンスをアーカイブ化し、デジタル人文学的な分析を日本心理学会と公開シンポジウムでオンライン発表し、個別事例学の方法論を提示した。(4)身体表現の制度化の比較現象学:8月に哲学、社会学、批判的人種理論、心理学を専門とする、台湾、フランス、アメリカ、日本の研究者を招いた国際シンポジウム「ミックスレイスの顔身体表象」をオンライン上で開催した。人種の経験や人種と容姿や化粧との関連についても研究を進め、日本顔学会が主催する顔学オンラインサロンで報告し、上記ハンドブックでその成果を発表した。21年3月には関本幸、クリストファー・ブラウン著『Race and the Senses』(2020)合評会をオンラインで開催し、社会的構築物としての人種経験の現象学的分析について議論した。

(5)顔身体カフェの実施:領域全体のアウトリーチ活動として、韓亜由美氏と共同し、第7回「顔身体カフェ:このまちでインクルーシブに出会う」を11月7日に芝浦で開催した。

2021年度は、河野は、拡張した心の医療・ケア領域への応用に関する国際学会での発表と、武道や舞などの伝統的なアートにおけるスキルとパフォーマンスを分析する研究、対話における身体性の効果について、コロナ禍によるオンラインでの対話と通常の対面での対話をビデオなどで録画し、独自アプリを使って比較して分析する研究を行なった。小手川は、人種をめぐる顔身体の知覚および偏見について現象学的観点から考察し、その倫理的意義について検討した。人種については文学作品を手がかりとした現象学的アプローチについても検討し、その成果を踏まえて、ヌスバウムの感情の哲学を手がかりに、差別や偏見による分断について考察した。

2022年度は、2021年度予算を一定額繰り越して、コロナ禍で実施が延期されていたフランスでの国際シンポジウムに参加することと、21年度まで蓄えられたデータを整理し、国際雑誌の編集を中心に研究の取りまとめを行うことを主眼にした。国際シンポジウムは、フランス北西部スリジー・ラ・サールに位置するスリジー国際文化研究センターにおいて開催され、フランス現象学を代表する二人の哲学者である E.レヴィナスと M.メルロ=ポンティの二人を主題とした最新の研究成果を発表・意見交換をし、この分野の現在の動向を総覧できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計28件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 河野 哲也	4. 巻 2020
2. 論文標題 人口と集中を抑制する新しい文化について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 32～44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11439/philosophy.2020.32	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KONO Tetsuya	4. 巻 25
2. 論文標題 The Concept of Natural Contact and the Culture of Diffusion	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 TRENDS IN THE SCIENCES	6. 最初と最後の頁 11_12～11_15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5363/tits.25.11_12	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kono Tetsuya	4. 巻 30
2. 論文標題 Recent movements in theoretical psychology in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Theory & Psychology	6. 最初と最後の頁 842～851
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/0959354320935205	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河野哲也	4. 巻 6
2. 論文標題 アフリカに哲学は存在するか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6. 最初と最後の頁 251-267
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小手川正二郎	4. 巻 121
2. 論文標題 人種の現象学：人種化する経験と人種化される経験から人種差別を考える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐古仁志	4. 巻 15
2. 論文標題 批判的常識主義に基づくパースの知覚論：直接知覚と間接知覚をつなぐ二重のアブダクション	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 セミオトポス	6. 最初と最後の頁 176-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐古仁志	4. 巻 15
2. 論文標題 科学の方法における発見とアブダクション	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 江戸川大学紀要	6. 最初と最後の頁 291-299
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kono, Tetsuya	4. 巻 37
2. 論文標題 Phenomenology of Ma and Maai: An Interpretation of Zeami 's Body Cosmology from a Phenomenological Point of View	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 New generation computing	6. 最初と最後の頁 247-261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s00354-019-00060-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河野哲也	4. 巻 120
2. 論文標題 科学・真理と民主主義の関係とその教育的意味	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 39-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kono Tetsuya	4. 巻 35
2. 論文標題 The symposium at the 40th Annual Conference of The Phenomenological Association of Japan: Phenomenology of Skilled Performance	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現象学年報	6. 最初と最後の頁 39-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野哲也	4. 巻 19
2. 論文標題 顔の比較現象学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本顔学会誌	6. 最初と最後の頁 25-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野哲也	4. 巻 36
2. 論文標題 夏目漱石と平塚らいてうにおける種と個人の相克	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 女性空間	6. 最初と最後の頁 29-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小手川正二郎	4. 巻 47
2. 論文標題 反出生主義における現実の難しさからの逸れ: 反出生主義の三つの症候	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 179-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 國領 佳樹	4. 巻 22
2. 論文標題 メルロ = ポンティの実在論的現象学: グールヴィッチとの隔たり	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 メルロ = ポンティ研究	6. 最初と最後の頁 61-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14937/merleaujp.22.61	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 國領 佳樹	4. 巻 35
2. 論文標題 ワークショップ 他者の感情はみえるのか?: 現象学と分析哲学の源泉から問い直す (日本現象学会第40回研究発表大会ワークショップ報告)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現象学年報	6. 最初と最後の頁 17-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐古仁志	4. 巻 14
2. 論文標題 「自己制御」とその極としての「希望」あるいは「偏見」: パースにおける「共同体」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本記号学会『転生するファッション』セミオトボス	6. 最初と最後の頁 166-179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sako, Satoshi	4. 巻 15
2. 論文標題 Considering the Roles of “Empathy” in an Ecological Approach from Peirce’s Perspective	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies in Perception and Action	6. 最初と最後の頁 157-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐古仁志	4. 巻 30
2. 論文標題 生成へと到る旅路 (プロセス): 哲学と心理学の <あいだ> の人類学者ティム・インゴルド	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 江戸川大学『江戸川大学紀要』	6. 最初と最後の頁 257-265
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小手川正二郎	4. 巻 13
2. 論文標題 難民の倫理学 見ず知らずの難民に責任を負うべきなのか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 情報文化論	6. 最初と最後の頁 26-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小手川正二郎	4. 巻 119
2. 論文標題 「男らしさ」(masculinities)の現象学試論 「男らしさ」の現象学はフェミニズムに寄与しうるのか?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小手川正二郎	4. 巻 12
2. 論文標題 人間主義と形而上学 人間性をめぐるハイデガーとレヴィナスの対決	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Heidegger-Forum	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐古仁志	4. 巻 29
2. 論文標題 「共感」に対する生態心理学的アプローチ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 江戸川大学紀要	6. 最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐古仁志	4. 巻 13
2. 論文標題 「投射」を手がかりにした「アブダクション」の分析と展開	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 賭博の記号論 (叢書セミオトポス13)	6. 最初と最後の頁 144-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐古仁志	4. 巻 11
2. 論文標題 批判的常識主義を媒介とした直接知覚と間接知覚の統合 : 生態学的知覚論をめざして	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 生態心理学研究	6. 最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡嶋隆佑	4. 巻 34
2. 論文標題 ベルクソン『物質と記憶』における「私の現在」の概念について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現象学年報	6. 最初と最後の頁 93-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野哲也	4. 巻 1118
2. 論文標題 排除なき世界への倫理	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡嶋隆佑	4. 巻 22
2. 論文標題 ベルクソン『物質と記憶』におけるイメージ概念について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 フランス哲学・思想研究	6. 最初と最後の頁 100-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐古仁志	4. 巻 10
2. 論文標題 エコロジカル・アプローチのあらたな展開に向けて 染谷昌義『知覚経験の生態学：哲学へのエコロジカル・アプローチ』書評	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 生態心理学研究	6. 最初と最後の頁 25-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計77件（うち招待講演 18件 / うち国際学会 15件）

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 カリブ・アフリカ哲学からの問い
3. 学会等名 京都フォーラム「世界哲学を構想する」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 間合いとは何か：現代哲学の観点から
3. 学会等名 日本認知科学会の研究分科会「間合い - 時空間インタラクション」特別企画『「間合い」とは何か：二人称的身体論』（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kono Tetsuya
2. 発表標題 Clothing as an Extension of the Body: A Phenomenology of Clothing Under Transcultural Conditions
3. 学会等名 International Symposium: Performing Self and Playing with Otherness: Clothing and Costuming under Transcultural Conditions, Research Center for Society and Culture (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 奥井遼
2. 発表標題 型・段取り・間：人形浄瑠璃における三人遣いの間合い
3. 学会等名 日本認知科学会間合い研第17回分科会「間合い - 時空間インタラクション」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小谷弥生
2. 発表標題 能における「間(あいだ)」と「合」について：能舞台における音楽
3. 学会等名 日本認知科学会間合い研第17回分科会「間合い - 時空間インタラクション」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 舞台芸能における間合い
3. 学会等名 日本認知科学会間合い研第17回分科会「間合い - 時空間インタラクション」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 マセソン美季
2. 発表標題 パラスポーツの経験から
3. 学会等名 科研費新学術領域研究(研究領域提案型)「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築: 多文化をつなぐ顔と身体表現」公開シンポジウム(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 牧野遼作
2. 発表標題 身体の動かし方を他者に伝え、気づかせる: リハビリテーションでの専門家とクライアント間の微細な相互調整
3. 学会等名 科研費新学術領域研究(研究領域提案型)「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築: 多文化をつなぐ顔と身体表現」公開シンポジウム(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 障害と身体運動、間身体的交流：パラスポーツとリハビリテーション
3. 学会等名 科研費新学術領域研究（研究領域提案型）「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築：多文化をつなぐ顔と身体表現」公開シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kono Tetsuya
2. 発表標題 Vegetable Soul and Animal Mind
3. 学会等名 What's Next!?: The Future of embodiment, Panel 3 "What's next for embodied cognition?", The 54th Annual Philosophy Colloquium, Cincinnati Arts and Sciences (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 私たちはファノンと南アフリカから何を学べるか：ファノンの解放思想、スティーブン・ビコ、ネルソン・マンデラ
3. 学会等名 日仏哲学会2021年春季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田喬, 小手川正二郎
2. 発表標題 人種の現象学
3. 学会等名 顔身体科研国際シンポジウム「ミックスレイスの顔身体表象」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐古仁志
2. 発表標題 学習の方法としての「対話」：パースにおける自己と共同体の成長
3. 学会等名 日本記号学会第40回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 國領佳樹
2. 発表標題 行為に基づく知覚の説明とその哲学的洞察
3. 学会等名 第87回心の科学の基礎論研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 人口と集中を抑制する新しい文化について
3. 学会等名 日本哲学会第七十八回年次大会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 アフリカ哲学を導入するために
3. 学会等名 京都フォーラム「世界哲学を構想する」会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kono, Tetsuya
2. 発表標題 Japanese gardens and the sense of nature
3. 学会等名 The 11th International Convention of Asia Scholars
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kono, Tetsuya
2. 発表標題 The Possibility of the Vegetable Mind as a Counter-concept of the Cartesian Mind
3. 学会等名 ISTP (The International Society for Theoretical Psychology) 2019 Conference
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 顔認知の発達と障害と
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会公募シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kono, Tetsuya
2. 発表標題 顔の科学：内側から見た顔
3. 学会等名 第24回日本顔学会大会公開サテライトシンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 環境問題と人口と集中を抑制する新しい文化について
3. 学会等名 比較文明学会例会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kono, Tetsuya
2. 発表標題 Kendo, Art of the Life-Giving Sword: Maai (distancing) and No-Beat Striking
3. 学会等名 ACAPS (Association des chercheurs en Activites Physiques et Sportives) 18em Congres international (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 西洋哲学から
3. 学会等名 日本学術会議哲学委員会主催公開シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kono, Tetsuya
2. 発表標題 The Concept of Ma and Maai in Zeami and Munenori Yagyu", Symposium "Proposing New Perspectives on "Intercorporeality" from East-Asian Philosophical Viewpoint
3. 学会等名 International Society of East Asian Philosophy, First International Conference
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 顔と身体を哲学はどう論じてきたか
3. 学会等名 第5回顔・身体学領域会議（科研費補助金助成事業「新学術領域研究（研究領域提案型）」）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KONO, Tetsuya
2. 発表標題 Skilled Performance of Distancing (Ma' ai) and the Philosophy Kendo and Noh Play
3. 学会等名 University of Wollongong Info/Liberal Arts Conference. Understanding and Explaining Skilled Performance: Looking Across Traditions (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小手川正二郎
2. 発表標題 トランスジェンダー現象学：ジェンダー変容下での顔身体
3. 学会等名 第4回顔・身体学領域会議（科研費補助金助成事業「新学術領域研究（研究領域提案型）」）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 國領佳樹
2. 発表標題 出来事/プロセスとしての知覚：メルロ=ポンティのホワイトヘッド
3. 学会等名 第41回日本ホワイトヘッド・プロセス学会大会公開シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 國領佳樹
2. 発表標題 ベルクソン-平井氏への質問
3. 学会等名 ワークショップ「汎心論を再起動する：ラッセル・ベルクソン・ホワイトヘッド」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐古仁志
2. 発表標題 直接知覚と間接知覚の統合としてのパースの知覚論：批判的常識主義の観点から
3. 学会等名 日本記号学会第39回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐古仁志
2. 発表標題 アブダクションとメタファー：身体に根差した学習方法としての投射
3. 学会等名 アメリカ哲学フォーラム第6回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sako, Satoshi
2. 発表標題 Projection as a way of Embodied Learning: On Metaphor and Abduction
3. 学会等名 科研費新学術領域「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築，顔と身体表現の比較現象学」自主ワークショップ“Radial Embodied Cognition”
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 Trans-cultural phenomenology of race
3. 学会等名 24th World Congress of Philosophy (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 Construction of the Face Body studies in transcultural conditions
3. 学会等名 KAL Workshop: Body matters, The Many faces of Embodied Cognition (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 J・J・ギブソンの情報概念とその根本的プラグマティズムの含意
3. 学会等名 シヨーン・ギャラガー招聘シンポジウム『匿名の視線と自己の成立』(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 Phenomenology of Skilled Performance
3. 学会等名 日本現象学会第40回大会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 トランスカルチャー状況をめぐって
3. 学会等名 「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築: 多文化をつなぐ顔と身体表現」, 第3回公開シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 身体性認知の新しい展開
3. 学会等名 第3回顔・身体学領域会議
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 現代における顔・身体の変容について
3. 学会等名 自主シンポジウム『トランスカルチャーとは何か? 心理学と哲学の協働』1 現代における顔身体の変容
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 What is Transculture?
3. 学会等名 自主シンポジウム『トランスカルチャーとは何か? 心理学と哲学の協働』2 トランスカルチャーとは何か?
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 インゴルドと「あいだ」
3. 学会等名 科研費新学術領域「顔と身体表現の比較現象学」自主シンポジウム「インゴルドと「あいだ」のシンポジウム」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shojiro Kotegawa
2. 発表標題 Phenomenology of “Yellow Race”
3. 学会等名 24th World Congress of Philosophy (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shojiro Kotegawa
2. 発表標題 Phenomenology of Masculinities: Can the Phenomenology of Masculinities Contribute to Feminism
3. 学会等名 Nordic Society for Phenomenology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐古仁志
2. 発表標題 <生成>へと到る旅路 哲学と心理学の<あいだ>のインゴルド
3. 学会等名 科研費新学術領域「顔と身体表現の比較現象学」自主シンポジウム「インゴルドと「あいだ」のシンポジウム」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐古仁志
2. 発表標題 批判的常識主義を媒介とした直接知覚と間接知覚の統合 生態学的知覚論をめざして
3. 学会等名 日本生態心理学会第7回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐古仁志
2. 発表標題 パースにおける学習理論とその展開
3. 学会等名 アメリカ哲学フォーラム第5回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐古仁志
2. 発表標題 パース的観点からの「自己制御」を通じた社会性の獲得について
3. 学会等名 日本記号学会第38回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 國領佳樹
2. 発表標題 前期メルロ＝ポンティの超越論的プログラムにおける身体・知覚・主体
3. 学会等名 第5回メルロ＝ポンティ哲学研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Eric Chelstrom
2. 発表標題 Sartrean Collective Intentionality: Criticisms of the Contemporary Approach
3. 学会等名 科研費新学術領域「顔と身体表現の比較現象学」自主シンポジウム「トランスジェンダーの哲学 & 共同行為論」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Eric Chelstrom
2. 発表標題 Unmasking Ourselves: The Disclosure of Gender Expectations in the Encounter with the Trans-Other
3. 学会等名 自主シンポジウム『トランスカルチャーとは何か？ 心理学と哲学の協働』2 トランスカルチャーとは何か？
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tamsin Kimito
2. 発表標題 Defining Transphobia
3. 学会等名 科研費新学術領域「顔と身体表現の比較現象学」自主シンポジウム「トランスジェンダーの哲学 & 共同行為論」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tamsin Kimito
2. 発表標題 Hard Movements: A Phenomenology of the Body and Sexual Schemas in Transition
3. 学会等名 自主シンポジウム『トランスカルチャーとは何か？ 心理学と哲学の協働』2 トランスカルチャーとは何か？
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Alia Al-Saji
2. 発表標題 A Phenomenology of Cultural Racism
3. 学会等名 科研費新学術領域「顔と身体表現の比較現象学」自主シンポジウム「差別と人種の現象学」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Alia Al-Saji
2. 発表標題 The Racialization of Muslim Veils
3. 学会等名 科研費新学術領域「顔と身体表現の比較現象学」ワークショップ「ムスリム女性のヴェールをめぐる学際研究」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Helen Ngo
2. 発表標題 Simulating the Lived Experience of Racism and Islamophobia: On 'Embodied Empathy' and Political Tourism
3. 学会等名 科研費新学術領域「顔と身体表現の比較現象学」自主シンポジウム「差別と人種の現象学」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 倫理と人間の限界：ヌスバウムとの対話
3. 学会等名 アメリカ哲学フォーラム第4回大会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kono, Tetsuya
2. 発表標題 Theorising power, agency and voice and silence in dialogic practices
3. 学会等名 The 17th Biennial conference of the International Society for Theoretical Psychology (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kono, Tetsuya
2. 発表標題 Transcendental Subjectivity as Actor network and the First Person Perspective
3. 学会等名 日本現象学会第39回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 自然だけでも文化だけでもない脳
3. 学会等名 日本科学哲学会第50回大会ワークショップ
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 離見の見と間合い
3. 学会等名 公開科研費シンポジウム『間とあいだの比較現象学』科研費助成事業「新学術領域研究」トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築(顔・身体学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 態（わざ）と音楽性
3. 学会等名 公開科研費シンポジウム『間とあいだの比較現象学』科研費助成事業「新学術領域研究」トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築（顔・身体学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河野哲也
2. 発表標題 知覚に先んじるメタファー：ガストン・バシュラールの物質的想像力
3. 学会等名 日本語用論学会メタファー研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kotegawa, Shojiro
2. 発表標題 To Have a Child and To Become a Parent
3. 学会等名 Nordic Society for Phenomenology, Norwegian University of Science and Technology（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kotegawa, Shojiro
2. 発表標題 How to Reconsider the Responsibility for Strangers from Levinas' Perspective
3. 学会等名 Levinas on Socio-Political Responsibility and Beyond（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小手川正二郎
2. 発表標題 人間主義と形而上学 人間性をめぐるハイデガーとレヴィナスの対決
3. 学会等名 ハイデガーフォーラム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小手川正二郎、國領佳樹
2. 発表標題 顔身体の現象学 概要と展望
3. 学会等名 公開シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」(第2回)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小手川正二郎
2. 発表標題 「男らしさ」(masculinities)の現象学試論 「男らしさ」の現象学はフェミニズムに寄与しうるのか?
3. 学会等名 フェミニズム研究会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡嶋隆佑
2. 発表標題 ベルクソン『物質と記憶』における「私の現在」の概念について
3. 学会等名 日本現象学会第39回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岡嶋隆佑
2. 発表標題 視覚と空間—メルロ＝ポンティによるベルクソン批判をめぐって
3. 学会等名 第42回ベルクソン哲学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐古仁志
2. 発表標題 「投射」を手がかりにした「アブダクション」の分析と展開
3. 学会等名 日本記号学会第37回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐古仁志
2. 発表標題 パースにおける「意識」の分類とその現代的再構築
3. 学会等名 アメリカ哲学フォーラム第4回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐古仁志
2. 発表標題 アフォーダンス学習の分析と展開：パースの観点から
3. 学会等名 日本認知科学会 「身体・システム・文化」研究分科会ワークショップ 「知覚と行為に関する国際会議 第19回大会（ICPA19）」報告会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sako, Satoshi
2. 発表標題 Peirce ' s Taxonomy of Consciousness and Its Modern Reconstruction
3. 学会等名 19th International Conference on Perception & Action (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sako, Satoshi
2. 発表標題 The Analysis and Development of Learning Affordance from Peirce ' s Perspective
3. 学会等名 The 17th Biennial Conference of The International Society for Theoretical Psychology (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 國領佳樹
2. 発表標題 『知覚の現象学』と実在論—メルロ = ポンティとアーロン・グールウィッチの隔たり
3. 学会等名 第23回メルロ = ポンティ・サークル研究大会シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 國領佳樹
2. 発表標題 愛の現象学— 『知覚の現象学』における情感的志向性について
3. 学会等名 東北哲学会第67回大会シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 國領佳樹
2. 発表標題 グルーブとは何か？聴覚と身体感覚のあいだ
3. 学会等名 公開科研費シンポジウム『間とあいだの比較現象学』科研費助成事業「新学術領域研究」トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築（顔・身体学）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計22件

1. 著者名 河野 哲也	4. 発行年 2021年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 224
3. 書名 問う方法・考える方法	

1. 著者名 河野 哲也	4. 発行年 2021年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 288
3. 書名 じぶんで考えじぶんで話せるこどもを育てる哲学レッスン 増補版	

1. 著者名 河野哲也、伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留、一ノ瀬正樹、檜垣立哉、千葉雅也、清水晶子、安藤礼、中田考、王前、上原麻有子、朝倉友海、伊藤邦武、沖永宣司、大黒弘慈、久木田水生、中野裕考	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 320
3. 書名 世界哲学史 8（「第10章 現代のアフリカ哲学」（河野哲也））(pp.251-275)	

1. 著者名 河野哲也、ミナタニアキ、安本志帆、高橋綾、松川えり、三浦隆宏、犬てつ(犬山×子ども×大人×てつがく×対話)、ヤマダクミコ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Landschaft	5. 総ページ数 268
3. 書名 子どもと大人のてつがくじかん てつがくするとはどういうことか? (「ファシリテーターに哲学の知識はどれほど必要か?」(河野哲也)) (pp.256-259)	

1. 著者名 河野哲也監修、NHK Eテレ「Q~こどものための哲学」制作班、古沢 良太、tupera tupera	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ほるぷ出版	5. 総ページ数 64
3. 書名 ふつうって どういうこと?	

1. 著者名 河野哲也監修、NHK Eテレ「Q~こどものための哲学」制作班、古沢 良太、tupera tupera	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ほるぷ出版	5. 総ページ数 64
3. 書名 なんでだかはずかしいの?	

1. 著者名 河野哲也監修、NHK Eテレ「Q~こどものための哲学」制作班、古沢 良太、tupera tupera	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ほるぷ出版	5. 総ページ数 64
3. 書名 なんでお母さんは けしょうをするの?	

1. 著者名 河野哲也監修、NHK Eテレ「Q~こどものための哲学」制作班、古沢 良太、tupera tupera	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ほるぷ出版	5. 総ページ数 64
3. 書名 なんで夜はこわいの？	

1. 著者名 河野 哲也、山口 真美、金沢 創、渡邊 克巳、田中 章浩、床呂 郁哉、高橋 康介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 464
3. 書名 顔身体学ハンドブック	

1. 著者名 小手川 正二郎、稲原 美苗、川崎 唯史、中澤 瞳、宮原 優、山本 千晶、酒井 麻衣子、池田 喬、佐藤 静、フィリップ・ヒューズ、古怒田 望人、藤高 和輝	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 208
3. 書名 フェミニスト現象学入門（「男だってつらい？」（川崎唯史・小手川正二郎）、「人種は存在するのか？」（池田喬・小手川正二郎））（pp.129-139, pp.142 - 154）	

1. 著者名 國領 佳樹、川口 茂雄、越門 勝彦、三宅 岳史	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 442
3. 書名 現代フランス哲学入門（「メルロ＝ポンティ」（國領佳樹））（pp.152-157）	

1. 著者名 河野 哲也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 248
3. 書名 人は語り続けるとき、考えていない	

1. 著者名 Chi-Ming Lam (ed.), Shiauping Tian, Chi-Ming Lam, Zhenyu Gao, Jessica Ching-Sze Wang, Peter Mau-Hsiu Yang and Jane Parish Yang, Satoshi Higuchi and Laurance J. Splitter, Tetsuya Kono and Shogo Shimizu, Takara Dobashi	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 208
3. 書名 Philosophy for Children in Confucian Societies: In Theory and Practice "The Development of P4C in Japanese Society and the Challenges for Practitioners" (Tetsuya Kono and Shogo Shimizu) (pp.141-155)	

1. 著者名 河野哲也監修、NHK Eテレ「Q～こどものための哲学」制作班、古沢 良太、tupera tupera	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ほるぷ出版	5. 総ページ数 64
3. 書名 お金でほんとうに 幸せになれる？	

1. 著者名 河野哲也監修、NHK Eテレ「Q～こどものための哲学」制作班、古沢 良太、tupera tupera	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ほるぷ出版	5. 総ページ数 64
3. 書名 そもそも自分らしさって なに？	

1. 著者名 河野哲也監修、NHK Eテレ「Q~こどものための哲学」制作班、古沢 良太、tupera tupera	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ほるぷ出版	5. 総ページ数 64
3. 書名 大人って どんな人？	

1. 著者名 安孫子信編、法政大学江戸東京研究センター、星野勉、田中久文、橋本順光、衣笠正晃、ジャン=フィリップ・ピエロン、チエリー・オケ、エリー・デュリング、河野哲也、福井恒明、クレリア・ゼルニク、アンドレア・フロレス・ウルシマ、陣内秀信	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 298
3. 書名 風土 (Fudo) から江戸東京へ (「荒野と名前のない海と：江戸東京の原意味」(河野哲也)) (pp.225-241)	

1. 著者名 小手川 正二郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 トランスビュー	5. 総ページ数 280
3. 書名 現実を解きほぐすための哲学	

1. 著者名 Rozzi R, May RH Jr, Chapin FS III, Massardo F, Gavin M, Klaver I, Pauchard A, Nunez MA, Simberloff D, Kono, T.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 481
3. 書名 From biocultural homogenization to biocultural conservation. Ecology and ethics, Vol.3	

1. 著者名 檜垣 立哉、小泉 義之、合田 正人	4. 発行年 2019年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 512
3. 書名 ドゥルーズの21世紀	

1. 著者名 千葉雅也	4. 発行年 2018年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 256
3. 書名 思弁的实在論と現代について	

1. 著者名 松葉 祥一、本郷 均、廣瀬 浩司、國領佳樹	4. 発行年 2018年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 430
3. 書名 メルロ = ボンティ読本	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築：多文化をつなぐ顔と身体表現」 http://kao-shintai.jp 顔と身体表現の比較現象学 https://www2.rikkyo.ac.jp/web/panta-rhei/ 河野哲也の哲学・倫理学研究室 https://www2.rikkyo.ac.jp/web/tetsuyakono/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小手川 正二郎 (Kotegwa Shojiro) (30728142)	國學院大學・文学部・准教授 (32614)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	國領 佳樹 (Kokuryo Yoshiki)		
研究協力者	小谷 弥生 (Kotani Yayoi)		
研究協力者	佐古 仁志 (Sako satoshi) (80713172)	東京交通短期大学・運輸科・講師 (42643)	
研究協力者	牧野 遼作 (Makino Ryosaku) (10780637)	早稲田大学・人間科学学術院・准教授 (32689)	
研究協力者	岡嶋 隆佑 (Okajima Ryusuke) (20889365)	新潟大学・人文社会科学系・准教授 (13101)	
研究協力者	奥井 遼 (Okui Ryo) (10636054)	同志社大学・社会学部・准教授 (34310)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計10件

国際研究集会 International Symposium: Performing Self and Playing with Otherness: Clothing and Costuming under Transcultural Conditions, Research Center for Society and Culture	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 顔身体科研国際シンポジウム「ミックスレイスの顔身体表象」	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 Kyle Shuttleworth著「The History and Ethics of Authenticity」合評会	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 Radial Embodied Cognition	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 第24回日本顔学会大会公開サテライトシンポジウム「顔の科学：内側から見た顔（Science of Face: view from the inside out）」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 KAL Workshop: Body matters, The Many faces of Embodied Cognition	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 シンポジウム「差別と人種の現象学」	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 ワークショップ「ムスリム女性のヴェールをめぐる学際研究」	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 What is Transculture? ” 科研費新学術領域「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」自主シンポジウム『トランスカルチャーとは何か？ 心理学と哲学の協働』（2: トランスカルチャーとは何か？）	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 公開科研費シンポジウム『間とあいだの比較現象学』科研費助成事業「新学術領域研究」トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築（顔・身体学）計画班「顔と身体表現の比較現象学」	開催年 2018年～2018年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------